

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 中谷 太希   |
| 学位の種類   | 博士（体育スポーツ学）   |
| 学位記番号   | 第29号  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当  |
| 学位授与年月日 | 令和8年3月24日   |
| 学位論文題目  | 動感促発能力の充実度を確認・可視化する実践的ルーブリック：選手から指導者へ移行した10年間の体操競技の技の指導事例から |
| 論文審査委員  | 主査 高橋 仁大<br>副査 金高 宏文<br>副査 金谷 麻理子<br>副査 関 朋昭                |

## 論文概要

本論文は、体操競技における技の指導において、学習者の動感に寄り添いながら習得・習熟を支援する指導者の動感促発能力に焦点を当て、その確認観点を構築するとともに、筆者の動感への関与の変容過程を明らかにし、指導実践の内省を支援する実践的ルーブリックを提案した研究である。筆者は選手から指導者へ移行する過程で、自らが経験的に習得していない技を指導する状況に直面し、実践知に依拠した指示や提案中心の動感への間接的関与が限界をもつことを体験した。こうした「教えることの難しさ」は、学習者の動感を起点に理解し、共に探究する動感への直接的関与の必要性を自覚する契機となり、本研究全体の問題意識を形成した。

本研究は、以下の三つから構成される。(1) 発生運動学に基づく先行知見を精読し、動感促発能力の充実度を捉えるための確認観点を指導現場で用いられるよう（実践的）に構築すること。(2) 構築した確認観点を筆者自身の10年間の指導実践に適用し、指導初期に見られた動感への間接的関与から、動感への直接的関与を意識的に実践しようとする変容過程を明らかにすること。(3) 筆者の動感への関与の変容過程および確認観点の運用上の課題を踏まえ、「動感促発能力の充実度を確認・可視化する実践的ルーブリック」を提案することである。

第1の研究では、発生運動学の精読を通じて、動感促発能力を「観察」「交信」「代行」「処方」の4観点12項目として整理した。これらは、単なる理論的分類として提示するのではなく、指導現場で評価に用い得る確認観点として実践的に再構成した。これにより、「何をどう見るか」「どのように動感に関与するか」を指導者自身が具体的に省察できる実践的枠組みが得られた。

第2の研究では、4つの指導事例（事例1：伸身トカチェフ、事例2：ツォ・リミン、事例3：タジェダ、事例4：鉄棒終末技）を対象に、自己評価（筆者自身：指導者）と当事者評価（対象者：学習者）を照合しながら筆者の動感への関与の変容過程を検討した。事例1・2では、筆者は実践知や習得者から得た知識に依拠して外側から技を「整える」指示的な関与、すなわち動感への間接的関与が中心であった。事例3では、筆者が未経験の技を扱う中で動感の「分からない不確かさ」を自覚し、学習者の動感を手がかりに寄り添い始める直接的関与が局所的に芽生えつつあった。事例4では、観察・交信・代行・処方が状況に応じて往還し、学習者の動感変化に応じて介入の強弱を調整する動感への直接的関与が条件付きで成立していたが、成功像の共有や情動変化の把握には課題が残った。4つの指導事例の分析を俯瞰すると、筆者の動感への関与の変容過程では、①自身の実践知に依拠する「依拠位相」、②不確かさを契機に共に動感を共に探求し始める「往還位相」、③動感を基点に関与を調整する「共創位相」が生じ、動感への関与の位相として3位相が導出された。

第3の研究では、これらの知見を踏まえ、動感促発能力の充実度を確認・可視化する「実践的ループリック」を提案した。このループリックは、促発指導における姿勢（技の動感の不確かさの自覚、学習者の動感への接近、共に動感を探ろうとする姿勢）と行為（観察・交信・代行・処方）の両面を3段階（L1：無意識的未実施、L2：意識的未実施／無意識的実施、L3：意識的実施）で整理した点に特徴がある。特にL2は、「やりたいができていない状態」と「明確に意識していないが表出する状態」が混在する、不安定で可逆的な移行段階として位置づけ、「姿勢の揺らぎ」や「偶発的な実践」を一方向的な発達モデルに還元することなく捉えるためのモデルとした。加えて、評価の揺らぎを防ぐための文脈的枠組みとして、「学習者の受容姿勢」「動感変化と介入の関係」「自己理解／自己調整の度合い」という3つの補助指標を導入した。これにより、指導者の介入と学習者の自律的变化を切り分けて解釈することが可能となり、省察支援ツールとしての妥当性が高められた。

総合的に、本研究の成果は三点にまとめられる。第一に、動感促発能力という従来暗黙的に扱われてきた実践知を、発生運動学の枠組みに基づき4観点12項目の確認観点として実践的に構築した点である。第二に、筆者自身の10年間の実践を対象とした縦断的分析を通して、動感への間接的関与から直接的関与へと移行する変容過程を「依拠—往還—共創」の3つの関与の位相として示し、動感への直接的関与がどのように成立し変容していくのかを明らかにした点である。第三に、実践的ループリックを作成し、指導者の動感への関与を評価および内省を支援する枠組みとして提案した点である。

本研究は、体操競技における技の「動感世界」という身体知の深層を扱いつつ、学習者と共に技を探究する動感促発能力を理論的・実践的に捉えた点に意義がある。今後は、複数指導者や他競技への適用を通じて確認観点および実践的ループリックの妥当性を検証し、指導者の省察を支援するプログラムの開発とその効果検証を進めていくことが課題となる。

## 論文審査の要旨

中谷太希氏の博士学位論文は、体操競技の技の指導において、学習者の動感に寄り添いながら習得・習熟を支援する指導者の動感促発能力に焦点を当て、その充実度を確認する観点を構築するとともに、著者の動感促発能力の変容過程を著者自身の10年間の指導事例から明らかにしている。さらにそれらの結果を踏まえて、指導者の指導実践の内省を支援するための動感促発能力の充実度を確認・可視化する実践的ルーブリックを提案している。その要旨は以下の通りである。

第1章では緒論として、発生運動学の立場から動感への関与の違いにより生じる促発指導とマネジメント指導の構造を視覚的に示した上で、著者が自身の指導スタイルの転換を余儀なくされた背景を示し、その指導スタイルの変容過程について動感促発能力の確認観点を基に明らかにすることを目指し、その結果から指導場面に汎用可能な「動感促発能力の充実度を確認・可視化する実践的ルーブリック」を提案するという、本博士論文の全体像を示している。

第2章では動感促発能力の充実度を確認する観点を明らかにするために、動感促発能力に関連する主要文献の精読から、その観点と内容を整理している。その結果「観察」「交信」「代行」「処方」という4つの観点の12項目として整理している。さらに各項目は指導現場で評価に用いるための具体的な問いかけの項目として再構成され、指導場面における省察・改善を支援する実践的ツールと位置づけている。

第3章では著者による4つの指導事例を振り返り、対象者の動感への関与について、第2章で整理した動感促発能力の確認観点をを用いて著者自身による自己評価と対象者による当事者評価を行い、その変容過程を検討している。4つの指導事例の振り返りから、著者の動感への関与は条件や局面に応じて「依拠位相」「往還位相」「共創位相」に変容していたことを示している。また動感への関与の位相は、対象者の受容姿勢や対象者自身のもつ動感に応じて揺らぎを示しながら表出または認識されることを指摘している。

第4章では動感促発能力の確認観点をを用いて、その充実度を可視化するための実践的ルーブリックを提案している。第3章で指摘された課題を踏まえ、この実践的ルーブリックでは促発指導における指導者の姿勢（技の動感の不確かさの自覚、学習者の動感への接近、共に動感を探ろうとする姿勢）と行為（観察・交信・代行・処方）の両面を「無意識的未実施」「意識的未実施／無意識的実施」「意識的実施」の3段階の評価レベルで構成している。さらにこの解釈には学習者側の状態を把握することが不可欠であることから、「学習者の受容姿勢」「動感変化と介入の関係」「学習者の自己理解・自己調整」の3つの観点に関する補助指標を設定し、実践的ルーブリックの評価を文脈に即して解釈することを可能にしている。

第5章では総合考察として、著者は実践的ルーブリックの意義を指導行為の可視化が可能となること、指導者の変容過程を段階的に理解する枠組みを提供すること、指導者と

学習者双方の視点を接続する機能を持つこととし、指導者が自らの実践を内省するためのツールとしての意義をもつことを述べている。

第 6 章で著者は本博士論文の意義として、体操競技の技の指導におけるコツやカンを伴う実践知を構造化し、指導者の姿勢と行為の相互関係から動感への関与のあり方を理論的・実践的に捉えた点にあることを述べている。

本博士論文は動感促発能力という従来暗黙的に扱われてきた実践知を、発生運動学の枠組みに基づき 4 観点 12 項目の確認観点として構築した点に高い学術的な意義がある。また著者の 10 年間の指導実践の分析から、動感への関与の変容過程を 3 つの位相として示し、動感への直接的関与がどのように成立し変容していったのかを明らかにした点に高い独創性を認める。さらに動感促発能力を可視化するための実践的ルーブリックを提案し、指導者の動感への関与を可視化し内省を支援する枠組みを示したことに高い実践的な意義がある。

論文審査の結果、本論文は審査基準を満たしていると認められた。